

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業  
「20 世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」  
自己点検・評価及び外部評価を終えて

本学では、大学全体で恒常的に PDCA サイクルを回すことを目的として、毎年テーマを定め、自己点検・評価活動を行っております。2016 年度は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択プログラム「20 世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」の事業期間終了に伴い、本学自己点検・評価委員会による自己点検・評価を行いました。

さらに、今回の自己点検・評価結果について、客観性・公平性を担保するため、外部評価委員として栗原彬氏（立教大学名誉教授）、佐藤慎一氏（東京大学名誉教授）、吉見俊哉氏（東京大学大学院教授）にご協力をいただき、外部評価を実施いたしました。

自己点検・評価報告書及び資料による書面審査、本学での面談調査及び丸山眞男文庫の見学を経て、外部評価委員 3 氏に外部評価結果をご執筆いただきました。自己点検・評価報告書と共に本学公式サイトに掲載いたしましたので、ご高覧いただければ幸いです。

本支援事業は 2016 年度で終了となりますが、プロジェクトは本学丸山眞男記念比較思想研究センターを中心に、今後も継続してまいります。外部評価委員の先生方には、自己点検・評価報告書に基づいた外部評価に留まらず、本プロジェクトの継続的な組織運営のために多大なるアドバイスを頂きました。深く御礼申し上げます。今後の運営に向け、学内で慎重に検討し、役立ててまいります所存です。

2017 年 3 月

東京女子大学 学長 小野 祥子  
自己点検・評価委員長 下出 鉄男

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「20 世紀日本における知識人と教養  
—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」  
自己点検・評価報告書

2017年 1月

東京女子大学 自己点検・評価委員会

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業  
「20世紀日本における知識人と教養－丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用－」  
自己点検・評価報告書

目 次

	頁
はじめに .....	1
第Ⅰ章 本事業の目的	
1. 本研究の研究目的が達成され、研究拠点を形成することができたか .....	2
第Ⅱ章 本事業を担う組織体制	
1. 研究目的を達成するための研究体制が組まれているか .....	4
第Ⅲ章 研究計画の進捗状況とその成果	
1. 研究テーマ毎に定めた年度別の具体的な研究内容は計画通り進捗しているか .....	7
第Ⅳ章 研究費の配分と活用	
1. 補助対象経費は適正に配分され有効に活用されているか .....	16
資料一覧 (掲載略)	
資料1-1: 「研究成果とその発表状況」(本事業参加研究者) 一覧表	
資料1-2: 「研究成果とその発表状況」(若手研究者) 一覧表	
資料2: 「研究費の支出状況」 一覧表 (年度別・テーマ別)	

## はじめに

丸山眞男の没後、ご遺族の意向により、1998年9月、丸山の旧蔵書約18,000冊と約6,200件のノート・草稿類が、本学へ寄贈された。本学は、本学図書館に丸山眞男文庫を設置し、これらの資料を保管・調査することを決定した。2002年、これらの貴重な資料がひろく活用されることを願って、比較文化研究所に丸山眞男記念比較思想研究センターを附置した。センターでは、丸山眞男文庫の調査・整理を進めるとともに、講演会、読書会等を開催し、出版物を刊行してきた。本学は、今後さらに、センターの活動を通して、丸山眞男研究の拠点となることを目指し、且つそれだけでなく、比較思想研究の進展にも貢献することを意図し、文部科学省2012年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業\*に以下の通りのプロジェクトを組織して応募申請し、採択された。

研究プロジェクト名：20世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—

研究テーマ1．20世紀知識人の教養と学問—丸山眞男文庫を素材として—

研究テーマ2．丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築

研究観点：研究拠点を形成する研究

研究期間：2012～2016年度

研究代表者：現代教養学部学部長 安藤 信廣

プロジェクト参加研究者数：19名

\*私立大学戦略的研究基盤形成支援事業は、私立大学が、各大学の経営戦略に基づいて行う研究基盤の形成を支援するため、研究プロジェクトに対して重点的かつ総合的に補助を行う文部科学省の助成事業である。

本自己点検・評価報告書は、2016年度末までに及ぶ本プロジェクトの最終年度にあたり、これまでの事業を総括し、今後の事業展開に生かすとともに、東京女子大学の教育・研究の発展に資することをめざすものである。

## 第 I 章 本事業の目的

### 到達目標

本事業の研究目的を達成し、研究拠点を形成する。

#### 1. 本事業の研究目的が達成され、研究拠点を形成することができたか

##### 【現状の説明】

##### (1) 本事業の研究目的

新しい世界認識を開く基礎となる教養の重要性が注目されている今日、20 世紀において様々な知的分野で巨大な足跡を残し、教養についても独自の認識を展開した丸山眞男の業績の再評価が強く求められている。また、その業績の再評価を通じて、教養及び教養教育の現在の意義の解明が期待される。

その状況下、本事業では、以下 3 点の研究目的を設定している。

- ・ 20 世紀知識人たちの教養形成過程及び教養観を解明する（研究テーマ 1）。
- ・ 丸山眞男文庫所蔵資料をデジタルアーカイブ化し、広く日本及び世界に向けて公開する（研究テーマ 2）。
- ・ 新渡戸稲造、南原繁、丸山らが知識人の国際的コミュニティ形成に果たした役割を明らかにし、21 世紀における新たな知的コミュニティ形成の方向性を探求する（研究テーマ 1、2）。

##### (2) 期待される研究成果

前記の目的を達成することで、人文・社会科学の様々な領域を総合し、新しい視点をもたらす教養の重要性と今後の方向性を提示することができる（研究テーマ 1）。且つ、20 世紀知識人のコミュニティの実態を把握し、今後の知的コミュニティ形成に資することができる（研究テーマ 1、2）。

また、第 III 章で述べるように、丸山眞男文庫所蔵資料のデジタル化、草稿資料類のデジタルアーカイブ上の画像公開、未公刊資料の翻刻・公刊等により、丸山文庫所蔵資料へのアクセスが容易且つ多様なものになり、当該資料を活用した研究成果の発展が期待できる（研究テーマ 2）。

これらの「期待される研究成果」については、丸山文庫所蔵資料を活用した諸種の論文、広範且つ多様な資料の活用を可能にするウェブサイトや図書を、本事業参加研究者が既に多数発表している。こうした成果の上に立って、丸山研究・日本研究・思想史研究の国際的拠点を創出し、併せて本学の社会科学分野の研究・教育基盤を強化することができる。

なお、本事業選定時に、「なぜ今丸山眞男か」との留意事項が付された。本事業は、その点に注意しつつ、事業期間を通じて、21 世紀における教養のあり方にとって丸山眞男の思想がもつ意味を明らかにし、またその成果を教育的事業にも反映させていく。

##### 【点検・評価、長所・問題点】

- ・ 教養及び教養教育の必要性は、社会の様々な場において近年特に強調されている。また、創立以来リベラル・アーツ教育を理念としてきた本学にとっても、現代社会の要請をふまえて教養及び教養教育について再検討することは必要な課題である。こうした社会的・学内的要請に鑑みて、本事業の研究目的は時宜を得ている。
- ・ 本事業の開始以前から丸山文庫所蔵資料を活用した研究が学内外で進んでいたが、本事業によって実現されたデジタルアーカイブ等のウェブサイトや未公刊資料公刊等によって、研究が更に広範且つ多様な拡がりを見せている。
- ・ また、教養教育に対する関心が高まっている現在、本事業の研究は高等教育のみでなく社会全体に裨益する所が大きいと考えられる。
- ・ 但し、20 世紀知識人の教養観の解明については、基礎となる多角的な研究成果は示し得

たが、今後更なる継続的研究が必要である。

・本事業の研究目的の設定及び期待される成果の見通しが時宜を得たものであったことは、次章以降の報告で示される。

以上のことから、本事業の研究目的は達成され、研究拠点を形成し得たといえる。

### 【将来の改善に向けた方策】

本事業によって研究拠点が形成された今、これからの課題はその安定的な運営にあることはいまでもない。この研究拠点としての丸山眞男記念比較思想研究センターから新たな情報を発信し、多くの研究成果を生み出し、国内外の研究・教育に広く貢献していくことが求められる。しかも本事業期間を通じて生み出されてきた高度な学術的内容を持った情報を今後も発信しつづけていくことが望まれる。

そのためにも本事業の研究目的に含まれた理念を理解した研究者たちによる協働体制の整備と維持、活動が必要である。

引き続き外部資金を得て、以下の方策を達成していく。

・20世紀知識人の教養観の解明等の研究は継続的に行う。特に丸山文庫には丸山眞男を中心とした知識人の書翰類が多数保存されているため、書翰類の調査・整理を進め、研究のための準備を整える。

・デジタルアーカイブ等の公開を継続し、利用しやすいものとするため、目録の改善・公開等を行い、新たな資料の調査・公開を実施する。

## 第Ⅱ章 本事業を担う組織体制

### 到達目標

研究目的の達成に向けた研究体制を整える。

#### 1. 研究目的を達成するための研究体制が組まれているか

##### 【現状の説明】

本事業は、本学丸山眞男記念比較思想研究センターを中心とし、同センター運営委員会と図書館が連携して研究支援体制を敷いている。研究者は政治学・政治思想史・国際関係史・歴史学・教育学・文学等の研究に携る東京女子大学教員8名と、丸山眞男研究及び日本政治思想史・政治学等の研究を行っている学外研究者9名、さらにそれらに近接した領域で活動している海外研究者2名によって構成されている。

各研究者の交流を図り、また研究テーマ1と研究テーマ2の認識の共有をめざし、隔月開催の研究会において、研究者間、テーマ1とテーマ2の間の連携を取っている。全体の統轄は、安藤信廣が当たっている。テーマ1については、安藤信廣を研究代表者とし、各研究者から研究状況につき報告を受け、研究会及び運営会議において統一的な進行ができるよう連絡・調整をしている。テーマ2は、黒沢文貴を研究責任者とし、その下に、翻刻関係（平石直昭、宮村治雄、中田喜万、河野有理）、楽譜関係（土合文夫）、書簡関係（松沢弘陽）、編集関係（黒沢文貴）の責任体制をとっている。

両テーマの連絡・調整は、安藤と黒沢両名が打ち合わせを行い、連携して研究を進めると共に、学外との交渉に係る事案は、丸山眞男文庫顧問（平石直昭）と適宜協議をもち、学内の運営方針に係る事案は、丸山眞男文庫を所管する丸山眞男記念比較思想研究センター運営委員会に諮ることによって事業を進めてきた。

また、特任研究員・研究補助員として日本政治思想史を専門とする若手研究者6名を採用すると共に、補助作業に本学大学院生・学部学生を雇用している。若手研究員・研究補助員は、丸山眞男文庫所蔵資料の整理・調査及びデジタル化、デジタルアーカイブ構築等の実務に携わると共に、参加研究者の研究・事業の推進のため、研究支援体制を担っている。なお、安藤・黒沢両名は、特任研究員・研究補助員を統督し、他の参加研究者とも協同して若手研究者の育成を図りつつ、実務上の運営に当たった。

##### 本事業参加研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
(テーマ1)			
安藤信廣	現代教養学部・教授、図書館長	幕末期知識人の相互交流と国際認識	20世紀の教養の原点の究明
雨田英一	現代教養学部・教授	戦後日本における民主化と教養・文化・教育をめぐる論議—丸山眞男を中心として—	近代日本の教養観と教育観の解明
小檜山ルイ	現代教養学部・教授	近代日本の知識人の系譜とキリスト教	近代知識人の知的系譜の解明
茂木敏夫	現代教養学部・教授	東アジア論と丸山眞男	東アジアにおける丸山受容史の究明
湯浅成大	現代教養学部・教授	丸山眞男のアメリカ観	日米知識人の交流関係の解明
油井大三郎	東京大学、一橋大学・名誉教授	第二次世界大戦後の日米関係と丸山眞男	国際政治における丸山の役割の解明
區 建英	新潟国際情報大学・教授	丸山思想史学と現代中国思想の比較省察	20世紀知識人の知的国際交流の解明
苅部 直	東京大学大学院法学政治学研究所・教授	丸山眞男における精神的貴族主義の系譜	丸山における教養観の解明

孫 歌	中国社会科学院 文学研究所・教授	国際的視野から読む丸山政治学の政治性	東アジアにおける丸山受容史の究明
アンドリュー・ バーシェイ	カリフォルニア大学 パークレー校・教授	丸山とアメリカ知識人との知的交流史の研究	日米知識人の交流関係の解明
渡辺 浩	法政大学法学部・ 教授	丸山眞男の日本政治思想史研究とその影響	丸山の日本思想史論と知的影響の究明
眞壁 仁	北海道大学大学院公共 政策学連携研究部・教授	日本の教養教育と思想史学の展開	近代日本の教養観と教育観の解明
(テーマ 2)			
黒沢文貴	現代教養学部・ 教授	文庫所蔵一次資料の網羅的な調査研究	丸山眞男文庫所蔵の未公開資料の翻刻と デジタル化の推進
土合文夫	現代教養学部・ 教授	文庫所蔵楽譜類とそれへの書きこみの調査 研究	丸山と音楽との関わり解明及び丸山の 教養・芸術観の検討
松沢弘陽	北海道大学・ 名誉教授	丸山眞男への国内・国外からの来簡の調査	日本内外での丸山の影響をさぐる研究の 基礎作業
中田喜万	学習院大学法学部・ 教授	「正統と異端」関係草稿の校訂と補注	重要一次資料の翻刻及びデジタル化の 基礎作業
平石直昭	東京大学・名誉教授	50年代後半の日本政治思想史講義の復元 (1956、59年度を担当)	重要一次資料の翻刻公開の基礎作業
宮村治雄	成蹊大学アジア太平洋研 究センター・客員研究員	50年代後半の日本政治思想史講義の復元 (1957、58年度を担当)	重要一次資料の翻刻公開の基礎作業
河野有理	首都大学東京都市 教養学部・教授	「正統と異端」研究会についての調査と資料 整理	重要一次資料の翻刻及びデジタル化の 基礎作業

本事業に係る若手研究者（特任研究員・研究補助員）

山辺春彦	特任研究員（2012年度～2014年度）・研究補助員（2015年度～2016年度）
川口雄一	特任研究員（2015年度～2016年度）・研究補助員（2012年度～2014年度）
金子 元	研究補助員（2012年度～2016年度）
佐藤美奈子	研究補助員（2012年度～2016年度）
播磨崇晃	研究補助員（2012年度～2016年度）
堀内健司	研究補助員（2012年度～2016年度）

【点検・評価、長所・問題点】

以下の点から、本事業の目的を達成するために、適切な研究体制が組織されたと評価できる。

- ・丸山眞男記念比較思想研究センターは、これまでも長く、資料調査・整理・公開・『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』刊行等の事業を担ってきており、その経験と実績を踏まえ、丸山眞男文庫のデジタルアーカイブ構築を実現する力量をもっていたが、それを基礎とする研究体制を構築できた。
- ・本プロジェクト参加研究者は、各々の分野の最先端で研究しつつ、丸山研究と現代の教養の研究において共通の接点と認識をもち、横断的に課題に取り組むことができる人物によって構成されているため、異分野の交流と協働を進めることができた。
- ・学内外の研究者によって構成されているため、協議、決定およびその実施に困難はあったが、構成員の努力により、総じて円満に運営されている。
- ・参加研究者による連携の実績は、定期的な運営会議、研究会及びその他の事業への参加・協力によって確認することができる。



- ・特任研究員を中心として、若手研究者・大学院学生の育成も推進され、研究業績及び研究分野の知識を積み重ねることができた。

#### **【将来の改善に向けた方策】**

以上のように各研究者間、テーマ間、及び研究者・実務間が有機的に機能している研究体制をふまえ、以下の点を将来の改善に向けた方策として提示する。

- ・丸山眞男記念比較思想研究センター委員会が中心となり、東京女子大学教員と学外の研究者（丸山眞男文庫顧問を含む）とが協力し、研究拠点として、ふさわしい体制を維持する。
- ・研究拠点としての運営体制の充実のため、東京女子大学内で教学上の視点、研究機関としての視点に立って検討を進めて行く。

### 第三章 研究計画の進捗状況とその成果

#### 到達目標

研究計画に従って、研究テーマ毎に研究を進捗させる。

#### 1. 研究テーマ毎に定めた年度別の具体的な研究内容は計画通り進捗しているか

##### 【現状の説明】

##### (1) 年次計画

本事業の年次計画概要は以下の通りである。

	研究テーマ1	研究テーマ2	共通
2012年度	丸山の既刊著書・論文の網羅的調査。	未公開草稿資料の全面的調査と翻刻開始。	
2013年度	丸山の研究の主題に沿って、これまでの諸研究を探索。	丸山に関連する欧米の文献調査。未公開草稿資料の調査をもとにデジタル化を開始。	
2014年度	初年度以来の業績をふまえ、中間シンポジウムを開催し成果をまとめる。	未公開草稿資料類の調査をもとに翻刻を進め、デジタルアーカイブ・システム構築に向けた準備開始。	自己点検・評価を実施。中間報告を作成・提出。
2015年度	丸山を中心とする近代日本の教養の思想的系譜に関する研究を進める。	未公開草稿資料の調査のデジタル化を進め、アーカイブ・システムを構築し、部分公開を開始。	
2016年度	5年間の成果をまとめ、各自が研究テーマに即して論文を作成・発表。	未公開草稿資料類のデジタルアーカイブを完成させ、資料を公開。未公開草稿資料類をまとめた資料集を刊行。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・20世紀日本における教養についての国際シンポジウムを開催。</li> <li>・5年間の成果をまとめ、研究成果を刊行。</li> <li>・プロジェクト全体に対する自己点検・評価及び外部評価を実施。</li> </ul>

##### (2) 研究計画の達成状況

本事業の進捗過程及び達成度は、以下の通りである。

本事業では、テーマ1とテーマ2との双方の参加研究者が協同して研究状況の共有並びに対外的公開を行い、全体的統一を図っているが、テーマ毎に独自性の強い課題をもって研究を進めている。テーマ1では、個々の研究者の研究を基礎とし、テーマ2では、デジタルアーカイブの構築等のための共同作業を中心としている。

本事業期間中の参加研究者の業績は、資料1-1「研究成果とその発表状況(1)」に示した。以下の〔 〕内の「001～」と対応する。また、同資料の＜研究成果の公開状況＞欄に、以下a～eの各回の概要を記載した。

- a) 研究会（隔月開催）。
- b) 公開研究会（年1回開催）。
- c) 講演会（年1回開催）。
- d) 中間シンポジウム（2014年6月開催）
- e) 国際シンポジウム（2016年10月開催）
- f) 『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』（年1回刊行）。プロジェクトの研究成果の報告。

#### ①テーマ1「20世紀知識人の教養と学問—丸山眞男文庫を素材として—」

年度ごとの進捗状況の概略は以下の通り。

2012年度には、丸山眞男の日本政治思想史研究の全体像の把握につとめ、各研究者が既

刊の講義録等を網羅的に読み、丸山眞男文庫所蔵の未公刊草稿資料類の内容を把握するようにした。その中で、以下のような研究を進めた。

- a) 前近代日本における宗教と政治の問題を扱った丸山著作の調査。
- b) 戦後日本の民主化と教養・文化・教育をめぐる思索内容を、丸山が師とした長谷川如是閑との比較による分析。
- c) 近代日本におけるリベラル・アーツ、教養の系譜、丸山の学問とアメリカの学問・社会・政治との関係、近代中国思想との関係などの検討。

**2013年度**には、丸山眞男が研究した主題に関連するその後の諸研究を、各研究者が探索しつつ、各自の課題を追究した。具体的には、主に次のような研究を進めた。

- a) 丸山の学問に関連する欧米及び中国の文献の研究。
- b) 長谷川如是閑と丸山の比較分析及び関連文献と資料の調査と整理。
- c) 1950年代の世界情勢、国際環境と政治思想の動向についての調査。
- d) 近代日本におけるリベラル・アーツ、教養の系譜として、新渡戸稲造と矢内原忠雄の理念・実態に関する研究。
- e) 20世紀の知的コミュニティの実態についての調査と考察。

**2014年度**は各研究者が、これまでの研究成果の中間的なとりまとめを試み、研究会・シンポジウム等において意見交流を行い、研究を深めた。具体的な研究内容は、主に次の通りである。

- a) 新渡戸稲造に関する研究及び戦後日本の教養教育の実態についての検討。
- b) 丸山が精神的貴族主義を構想するにあたり念頭においた諸思想の検討。
- c) 丸山の「執拗低音」の視点に基づく中国の伝統思想の構造の分析。
- d) 「現代世界の中で丸山眞男をどう読むか」を統一テーマとした中間シンポジウムの開催。

苅部直「政治のための教養—丸山眞男百歳—」は、現代において市民が政治にかかわっていくための教養として、ルールを共有した上で競いあう「遊び」の修練を重ねることをリベラル・デモクラシーが存立する条件と考えた丸山に学ぶべきものがあると論じた。油井大三郎「丸山眞男とアメリカ文化の交錯」は、「自立した市民」の育成に生涯をかけた丸山から学ぶことが現在切実な課題となっているという問題意識から出発している。區建英「丸山と中国の近代的思考の模索—私の世代の体験を中心に—」は、日本の精神構造の深層に潜む執拗低音を捉えようとした丸山の思想史方法論が、今なお儒教の伝統が深層で持続している中国において、アクチュアルな問題関心のもとに受容されていることを明らかにした。趙星銀（招聘）「韓国における丸山眞男」は、個人の自立と政治との緊張を「自由」の問題として考える経験が乏しい韓国では、丸山が探究した「反・反共」の自由というものを理解することが必要であると論じた。

**2015年度**は、前年度以降に公刊を開始した未公刊資料や新たに公開したバーチャル書庫・草稿類デジタルアーカイブ等（後述：テーマ2）により、各研究者が丸山文庫所蔵資料を活用し、最終年度発表予定の成果に向けて研究を進めた。具体的な内容は次の通りである。

- a) 戦後日本の民主化と教養・文化・教育をめぐる思索内容を、丸山と丸山が師とした南原繁との比較による分析・整理。
- b) ロバート・ベラーの学問方法論に対する丸山の評価、宗教と社会科学との関係についての考え等、丸山とベラーとの知的交流の内容についての検討。
- c) 中国思想史における丸山『日本の思想』の方法論の適用、丸山の孫文「三民主義」論についての検討。
- d) 丸山の儒教解釈及び、「教養」教育において思想史学のはたす役割、近現代日本の思想史研究における「儒教」の位置づけについての検討。
- e) マルクス主義批判と政治学の原理の再構成を並行した1950年代の丸山の論文と1960年

度の政治学講義との関連性の検討。

2016年度は、各研究者がこれまでに進めてきた研究を総括すると共に、現在の国内外の政治・社会・文化の状況を見据え、成果を論文としてまとめる。またその中で、成果を集約的に示す国際シンポジウムを開催し、意見交流を行い、研究を深めた。具体的な研究内容は、主に次の通りである。

- a) 改定前の教育基本法と南原繁の教育論議との関連性に対する分析。
- b) 戦後日本の社会科教育に対する尾崎行雄、清水幾太郎、丸山眞男それぞれの関わりについての調査・分析。
- c) 高校教育における丸山の文章の用いられ方、丸山の「政治と教育」に対する考えについての調査・検討。
- d) 国連中心主義の思想について、丸山と中村哲・横田喜三郎との比較による検討。
- e) 日本の「占領改革」の研究史の総合的な検討。
- f) 丸山が戦時期に読み込んだドストエフスキー、波多野精一、その他の宗教関連著作に対する丸山の理解、及びそれとロバート・ベラーとの思想的関係についての検討。
- g) 丸山の「執拗低音」の視点に基づき、孫文の思想の特質についての検討。
- h) 「新しい丸山眞男像の発見 その世界大の視圏と交流のなかで」を統一テーマとした国際シンポジウムの開催。

平石直昭「丸山眞男文庫の意義と可能性について」は、丸山文庫の設立背景、設立後の運営と資料調査の過程を詳しく紹介し、多くの人々の尽力と多様な試みとによって、丸山文庫がこれからの丸山研究はもとより、人文・社会科学研究とその教育、アーカイブ研究とその実践へ寄与する意義と可能性を明らかにした。ヴォルフガング・ザイフェルト（招聘）「丸山眞男とドイツの思想・学問―戦前、戦中、そして戦後―」は、ヘーゲルとマルクス、マンハイム、ウェーバー、シュミット、ノイマンなど丸山の思想・学問を理解する上で不可欠のその読書経験について論じ、丸山の思想・学問の歴史的意義を考える上で、フランクフルト学派との比較の必要を示唆した。孫歌「丸山眞男の「三民主義」論」は、孫文の「三民主義」とそれに対する丸山の解釈との差異に着目し、そこから丸山の「三民主義」解釈の普遍的意義を論じ、丸山の政治思想史における視座が常に「政治教育」の展望を伴っていたことを示した。アンドリュー・バーシェイ「プロテスタント的想像力―丸山眞男、ロバート・ベラー、そして日本思想研究に関する覚書―」（紙上参加）は、丸山の学問とそれを規定し続けた実存的動機を取り上げ、それをロバート・ベラーにおける学問及びその実存的動機と比較することによって、両思想家の普遍的意義を論じた。金錫根（招聘）「韓国における丸山眞男の思想・学問の受けとめられ方」は、韓国社会における丸山と日本思想史への理解のあり方・受容について紹介し、韓国社会で丸山を読むことが近代性への理解、伝統に対する態度、自己を相対化し他者と対話する素地などを育てていくことに意義をもっていること、翻ってそのことは日本でも同様であることを論じた。

研究者ごとの進捗状況の概略は以下の通り [各研究者の業績は資料 1-1 を参照]。

- ・安藤信廣 2012・2013年度は、主に幕末期日本の政治思想について調査・考察した。吉田松陰の思想につき考察する過程で、水戸学に集約される問題意識―儒学の自己発展という側面と対外認識の緊迫化という側面の葛藤―の再検討に力を注いだ [003, 019, 202-1]。2014年度は、水戸学全体の動向をふまえて幕末の知識人の思想について検討した。2015・2016年度は、これまでの研究、丸山眞男文庫所蔵資料を踏まえて、「幕末知識人の相互交流と国際認識」というテーマの下、論文の作成を進めた [172, 184, 185]。
- ・雨田英一 2012・2013年度は、長谷川如是閑の発言に見られる教育・教養の伝統とは何かを明らかにするために、長谷川が精力的に取り組んだ戦時下での議論及び戦後の議論をとりあげ、時代の背景や思潮との関係で考察した [001, 002, 202-6]。2014年度は、これ

までの考察をふまえ、なお長谷川の思想で注目される「形」の思想について検討を加えた [039]。2015・2016年度は、南原繁の教育論議に比重を置き、丸山のそれと比較すると共に、尾崎行雄・清水幾太郎など同時代の知識人の社会科教育との関わりについて調査・研究を行った [038, 088, 089, 172]。

- ・ **小檜山ルイ** 2012・2013年度は、北海道大学新渡戸稲造文庫所蔵資料の調査を行い、それをふまえて、知識人の家庭認識等を考察した。また、主に丸山眞男の親世代にあたる知識人たちが、1920年代にその知の枠組みに女性や家庭の問題をどのように取り入れていたかについて考察し、第3回研究会で報告を行った [007, 008, 024, 202-3, 203-5]。2014年度は、日本と米国での体験に根ざした内村鑑三の「ホーム」論について考察した [066, 181, 191]。2015・2016年度は、札幌農学校第一世代（新渡戸、内村、宮部金吾）、第二世代（有島武郎、森本厚吉）の「ホーム」論について検討を重ね、第5回公開研究会で報告を行った [067, 068, 103, 104, 105, 106, 121, 161, 168, 172, 192, 193, 194, 198]。
- ・ **茂木敏夫** 2012・2013年度は、(1)丸山の日本政治思想史研究において東アジアがどう位置づけられているか、(2)丸山の議論をふまえることにより、どのような東アジア論が構築できるか、(3)東アジアからは丸山の議論がどう受けとめられているかを課題とした。その成果については、2つの国際学会等で発表した [016, 176, 179, 180, 183, 203-2]。2014年度については、上記3つの課題をひきつづき検討し、東京女子大学の講義（「中国研究Ⅰ」・2014年度前期）にも反映させた [033, 034, 035, 143]。2015・2016年度は、以上の課題と考察を中間的にまとめ第10回研究会で報告すると共に、丸山眞男文庫所蔵資料を踏まえて、「東アジア論と丸山眞男」というテーマの下、論文の作成を進めた [076, 077, 078, 079, 080, 114, 115, 116, 160, 172, 196, 200, 202-10]。
- ・ **湯浅成大** 2012年度は、丸山文庫所蔵の丸山作成の英文草稿を調査した。2013年度は、「丸山眞男のアメリカ観」というテーマの下、アメリカ政治学との接点を模索した。2014年度は、テーマ2の新資料の調査にも加わり、丸山政治学とアメリカ政治学の関係性について更に考察した [036]。2015・2016年度は、研究の進展に伴い、丸山と欧米知識人との関係を考える上で、丸山が海外で行った講演等の調査が重要という認識に至り、丸山文庫所蔵の完成度の高い英文草稿の調査を更に進めると共に、その結果を第13回研究会で報告、検討を重ねて重要度の高い資料の翻訳を行った [081, 126, 127, 172, 202-13]。
- ・ **油井大三郎** 2012年度には、1960年代の社会運動の国際比較に関する共同研究の成果を刊行した [017, 130, 131]。これを足掛かりに、丸山眞男とアメリカ文化の接点について調査を開始した。2013年度は「丸山眞男とアメリカ文化の交錯」というテーマの下、近代化論をめぐる論争を中心に検討した [140, 141]。2014年度は前年度の考察を下に、「思想の科学」グループなどとの関係を補充調査して、中間シンポジウムで報告した [082, 083, 201-1]。2015・2016年度は、1960年代の社会運動と丸山との関係、「占領改革」を対象とした日本の研究史を整理した。それらをふまえて、先のシンポジウムでの認識を発展させ、論文の作成を進めた [084, 085, 161, 172]。
- ・ **區建英** 2012年度には、丸山思想史学の方法と視点を運用しつつ近代中国思想を省察する一つの試みとして、国民形成における個人の自由を模索した中国の嚴復の思想について考察した [138]。2013年度には、主に丸山の福沢諭吉研究の視点を通して、福沢の思想と中国近代知識人の思想とを比較し、中国の近代化について日本思想との共通点と相違点を探り、とくに中国思想の前近代から近代への継起における問題点を見出そうと試みた。その過程で、現代中国の文化大革命時代および今日の改革開放時代の思想の深層に連続している思考様式をつかむことができた [177, 178]。また、丸山思想史学をめぐって、台湾大学などの研究者や大学院生と交流し、意見交換を行った。2014年度には、丸山の「執拗低音」という視点によって、中国の伝統的な思想構造を分析し、その成果を中間シンポジウムで報告した [040, 150, 151, 201-1]。2015・2016年度は、対象を孫文

の「三民主義」に絞り込み、丸山の「執拗低音」の視点を応用した論文の作成を進めた [090, 091, 162, 172, 173, 187, 188]。

- ・**苅部 直** 2012年度には、丸山の思想史的系譜の理解を深めることをめざし、近代日本の教養観について検討した。それとの関連で、丸山の精神的貴族主義について考察した [005, 129]。2013年度は、前年度にひきつづき、丸山の思想史的系譜の理解、丸山以前の教養認識について調査・考察した [020, 132, 133, 134, 202-4]。2014年度は、戦後日本の教養・教育をめぐる思索につき、丸山及び南原繁の発言に注目しつつ検討を進め、その成果を中間シンポジウムで講演した [042, 043, 044, 045, 046, 047, 048, 049, 050, 051, 052, 053, 054, 055, 056, 057, 058, 201-1, 205, 206]。2015・2016年度は、高校教育における丸山の文章の扱われ方、丸山の「政治と教育」に対する考えについて、また、中村哲・横田喜三郎との比較によって浮かび上がる丸山の国連中心主義の思想について検討し成果をまとめた [092, 097]。以上の研究をふまえ、論文の作成を進めた [093, 094, 095, 096, 163, 164, 165, 166, 172, 210, 212, 217]。
- ・**孫 歌** 2012・2013年度は、丸山文庫で資料を調査し、未公刊の講演録「孫文と政治教育」を発見して、丸山政治思想の重要な一面である近代中国認識について調査・検討した [009]。また共産主義体制についての丸山の認識についても考察した。2014年度は、中国近代史における孫文の意味を考えるうえで、丸山のこのテキストを位置づけ、丸山政治学から照射された中国の政治原理を考察する作業を行った [144]。2015・2016年度は、丸山『日本の思想』の方法論に基づいて中国思想史における異文化受容の問題を検討し、次いで丸山の孫文「三民主義」論について考察をまとめ、その成果を国際シンポジウムで報告した [069, 155, 172, 201-2, 218]。
- ・**アンドリュー・バーシェイ** 2012・2013年度は、近現代日本の社会科学の様相を、丸山の仕事を中心に概観した。2014年度は、丸山とアメリカ政治思想との接点を中心に両者の特徴について考えた。2015年度は、丸山文庫に直接赴き、ロバート・ベラー関連資料、文庫所蔵の宗教関連著作について調査を行い、ベラーと丸山との知的交流について考察を深めた [071, 149]。2016年度は、これらの成果をまとめ、国際シンポジウムで報告した（紙上参加） [172, 201-2]。
- ・**渡辺 浩** 2012年度は、前近代日本における宗教と政治についての丸山の著作を読み、且つ思想史的系譜につき考察した。2013年度は、主に、丸山の儒教・朱子学の解釈について研究を進めた。主な対象は、『日本政治思想史研究』『福沢諭吉の儒教批判』『忠誠と反逆』『闇齋学と闇齋学派』である。2014年度もその研究を継続して進め、その成果の一部は、2014年7月にソウルで開催された、丸山に関する国際会議において発表した [182]。また、丸山の考える「人格」について、ジェンダーの観点から考察を加えることも試みた [086, 203-3]。2015年度は、丸山の「政治学史」講義の原稿を翻刻し、彼の政治思想史研究の特質に関わる資料調査を行った [117]。2016年度は、以上の調査・成果をとりまとめ、論文の作成を進めた [118, 172, 197]。
- ・**眞壁 仁** 2012年度は、前近代日本の政治思想について考察し、それに関する丸山の著作・関係資料等を調査した。2013年度は、近代日本の教養の位置づけをめぐって、丸山の観点を参照しつつ、矢内原忠雄を中心に考察した。2014年度は、丸山の精神的貴族主義に関連づけながら、前近代日本の思想家の再認識を行った。その成果を第9回研究会で報告、内容を推敲した上、論文として発表した [074, 202-9]。2015・2016年度は、これまでの研究、丸山眞男文庫所蔵資料を踏まえて、「日本の教養教育と思想史学の展開」というテーマの下、論文の作成を進めた [112, 172, 195, 214]。

## ②テーマ2「丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築」

- ・丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査・翻刻公刊

(1)計画通り、丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査を進めた [012, 018, 025, 026, 031,

037, 073, 087, 111, 119, 123, 172]。この調査を反映した資料の細分化、及び関係者による資料の寄贈等により、資料件数が増加した(2016年12月16日現在、公開資料約5000点)。

(2)上の調査等をふまえ、これまでに公刊した出版物、今後刊行予定の出版物は以下の通り。(a)学術的に重要な未公刊草稿を『センター報告』誌上に翻刻した[014, 030, 032, 110, 117, 120, 124, 127]。(b)丸山文庫所蔵資料による新たな校訂を本文に反映した『丸山眞男集』全16巻(岩波書店)の第4刷を2014年3月～2015年3月に公刊。(c)丸山文庫所蔵資料による新たな情報を反映した新訂増補『丸山眞男集』別巻を2015年7月に公刊[159]。(d)東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集 別集』(全5巻、岩波書店)が2014年12月より刊行開始(現在第3巻まで刊行)[147, 157, 158]。第4巻・第5巻は、丸山文庫所蔵の「正統と異端」研究会の録音記録(80時間分)を中心とした資料が収録される予定で、現在、文字起こし作業、本文校訂、関連資料の調査を進めている[022, 023, 098, 120, 203-1]。(e)丸山が東京大学法学部で行った「東洋政治思想史」講義録の1956年度分より1959年度分を、『丸山眞男講義録』続巻として、東京大学出版会より刊行する。現在ほぼ講義の復元作業を終え、2017年3月入稿、同年9月刊行の予定[011, 014, 032, 109, 117, 202-1]。

#### ・丸山眞男文庫所蔵書簡類の調査・翻刻公刊

丸山文庫所蔵の書簡類(丸山眞男宛来簡類)の調査とリスト作成が進行中。その中で、吉野源三郎が丸山に宛てた書簡36点を翻刻した[資料1-2: 228]。2017年3月には、新たに発見された吉野源三郎書簡4通のほか、加藤周一が丸山に宛てた書簡26通を翻刻・公刊する[124 / 資料1-2: 241]。

#### ・丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類のデジタル化とデジタルアーカイブ構築

(1)丸山文庫所蔵の草稿資料類を対象としたデジタルアーカイブを、2015年6月、構築・公開した。当該システムによって、所蔵資料の詳しい検索を可能にすると共に、資料の画像をインターネット上で閲覧することを可能にした。2015年12月には、丸山眞男作成資料のほぼすべてを含む資料はデジタルアーカイブ上に画像公開している。

(2)丸山文庫所蔵の草稿類資料に登録されている岡義武作成資料を、2016年7月、著作権継承者の許諾を得てデジタルアーカイブ上に公開した。著作権継承者の意向により資料の一部は、本学図書館内での限定公開としている。

(3)ブックスキヤナを用いた当該資料のデジタル化作業が2013年度より進行。対象となる資料約5,000点のうち、2016年12月16日現在、約2,300点のデジタル化が終了した(デジタル化対象資料の46%に相当)。

#### ・丸山眞男文庫バーチャル書庫の構築

丸山文庫所蔵の図書資料類を対象としたバーチャル書庫を、2015年3月に構築・公開した。当該システムによって、丸山文庫所蔵図書資料類が丸山宅に所蔵されていた時の状態をインターネット上で閲覧可能とした。当該システムでは、個々の書誌が東京女子大学図書館OPACの詳細情報とリンクしており、丸山の書込みの有無やその程度まで把握できる。蔵書状況から丸山の思想・学問の内容へのアプローチを可能とする研究リソースである。

#### ・丸山眞男文庫所蔵楽譜類の調査・デジタル化

(1)丸山眞男文庫所蔵の楽譜類、とくに丸山自身の書込みが為されているものを中心とする調査と研究が進行中[025, 202-2, 202-11]。(2)ブックスキヤナを用いて丸山眞男文庫所蔵楽譜類の丸山による書込みのあるページのデジタル化作業を進めた。2015年3月、全434冊のデジタル化が完了、公開し閲覧可能となった。

#### (3) その他の研究成果、事業・企画等

##### ①丸山文庫所蔵資料を用いたその他の研究成果

以上の事業の成果により本事業の内外から新しい研究成果が生まれている。以下はその

主要なものである。

・若手研究者による研究業績

本事業の実務に携わっている若手研究者たちは、以上の事業全体及びその成果について大きく寄与しているが、同時に参加研究者の研究指導の下、研究成果を発表した。その多くは、丸山文庫所蔵未公刊草稿資料類の翻刻公刊である〔資料 1-2: 223, 226, 227, 228, 232, 234, 235, 236, 240, 241, 242, 250, 252, 253〕。これらの翻刻の成果はすでに活用されつつある〔資料 1-2: 225, 229, 233, 238, 243, 257, 260, 261, 262, 265, 266〕。

・丸山文庫所蔵資料を活用した諸研究

本事業が順次行っている丸山文庫所蔵資料のデジタル化、また草稿資料類のデジタルアーカイブ上の画像公開、バーチャル書庫の公開、未公刊資料の翻刻・公刊等により、丸山文庫所蔵資料へのアクセスが容易且つ多様なものになった。その副次的効果として、当該資料類を活用した研究成果が、本事業参加研究者の外からも現われている。その主なものとして、以下のものが挙げられる。

- ・橋本春美「東京女子大学図書館における学習支援の取組と丸山眞男文庫」『人文会 news』第 116 号、2013 年 10 月
- ・西村稔「知識人と「教養」(1)―丸山眞男の教養思想―」(『岡山大学法学会雑誌』第 64 巻第 1 号、2014 年 9 月。以後連載がつづき、現在第 5 回まで公刊)
- ・権左武志「日本ナショナリズムの呪縛とその克服」(『現代思想』2014 年 8 月号)
- ・奥波一秀「〈知性の愚者〉であること」(同前)
- ・大久保健晴「丸山眞男における明治思想史研究の展開」(The Asan Institute for Policy Studies 主催シンポジウム“Maruyama Masao and the East Asian Thoughts : Modernity, Democracy and Confucianism”、韓国・牙山市、2014 年 7 月)
- ・松本礼二(編)『政治の世界 他十篇』(岩波文庫、2014 年)
- ・古矢旬(編)『超国家主義の論理と心理 他八篇』(岩波文庫、2015 年)
- ・奥波一秀「丸山眞男における音楽と啓蒙の問題」(『図書』2015 年 1 月号)
- ・阪本尚文「丸山眞男と八月革命(1) 東京女子大学丸山眞男文庫所蔵資料を活用して」(『行政社会論集』第 28 巻第 1 号、2015 年)
- ・田中久文ほか「丸山眞男の再評価 (日本倫理学会第 65 回大会 主題別討議報告)」(『倫理学年報』第 64 集、2015 年 3 月)
- ・高山大毅『近世日本の「礼楽」と「修辞」——荻生徂徠以後の「接人」の制度構想』東京大学出版会、2016 年

②本事業をふまえたその他の事業・企画等

さらに、上記の成果等を受け、以下のように新たな企画や出版等が展開され、波及的にデジタルアーカイブ等の利用者が増加している。

・丸山眞男生誕百年記念企画の開催

2014 年 10 月～12 月、杉並区立西荻図書館と共同で丸山眞男記念比較思想研究センターは、「丸山眞男生誕百年」企画を開催した。西荻図書館に資料(複製)を提供し展示を行った。また開催期間中、西荻図書館で関連の講演会を行った〔209 / 資料 1-2: 261〕。

・「丸山眞男没後 20 周年記念 東女生が挑む 丸山眞男展」の開催

2016 年 7 月～10 月、本学図書館と共同で丸山眞男記念比較思想研究センターは、「東女生が挑む 丸山眞男展」を開催した。これは本学大学院生・学部学生を対象とした企画で、図書館内で丸山眞男の生涯や著作を学生に広く紹介すると共に、コラボ企画として書評を募集し、丸山著作・関連著作を読む機会をつくった。著作紹介にあたっては、若手研究者が紹介文の作成やセミナーの開催を行った。展示と書評募集は夏季休暇を挟む 3 か月程度の短期間であったが、セミナーには約 30 名の学生が集まり、6 点の書評が集まった。学外の来訪者からも好評を博した〔資料 1-2: 239〕。



#### ・丸山著作の文庫化、テレビ番組等による一般的普及

(1)本事業期間中、既刊の丸山著作の文庫化が進められ、その中で丸山文庫所蔵資料が多く用いられた。以下の刊行物がそれである。松本礼二編『政治の世界 他十篇』(前掲書)、古矢旬編『超国家主義の論理と心理 他八篇』(前掲書)、松沢弘陽・植手通有・平石直昭編『定本 丸山眞男回顧談』(上・下、岩波現代文庫、2016年)。(2)2014年7月19日、NHK教育(Eテレ)にて「2014年度「知の巨人たち」第3回 民主主義を求めて—政治学者 丸山眞男—」が放映され、その中で、丸山文庫所蔵資料や本事業の概要も紹介された[208]。その他、本プロジェクト期間中、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞をはじめとする多数の新聞記事で事業の成果が紹介され、そのことによって、講演会等への参加者が増す等、丸山眞男及び丸山文庫への関心を大きく喚起している[210, 211, 219, 220 / 資料1-2: 263]。

なお、プロジェクトの活動及び成果は、随時同プロジェクトの公式ウェブサイトで公開されている(<http://office.twcu.ac.jp/univ/research/project/maruyama-project/>)。

#### 【点検・評価、長所・問題点】

- ・事業全体としては多大な成果を生み、計画通りに進捗している。(1)テーマ1に関しては、個別の研究のほか、研究会、公開研究会、中間シンポジウム、国際シンポジウムを開催した。また、最終年度における論文集の刊行が進んでいる。(2)テーマ2に関しては、とくにバーチャル書庫、デジタルアーカイブの構築・公開をはじめとする、諸資料の調査・整理・デジタル化を実現した。(3)各研究者の業績から、両テーマ間の連携が円滑に行われ、個々の事業・研究が飛躍的に発展したことがわかる。
- ・本事業の進展に伴い、研究拠点としての丸山眞男記念比較思想研究センター及び丸山眞男文庫の意義が一層明らかになった。そのことによって、学外からの反響も大きく、丸山研究及び日本思想史研究の全国的な活性化が起きている。このため各種刊行物や展示等の企画が立ち上がり、本事業参加研究者もそうした出版事業や企画に協力した。こうした状況は、それまでに蓄積してきた諸作業・研究やそれらに伴う成果があったために可能となったものである。
- ・最終年度に刊行する予定であった資料集(テーマ2)が、『丸山眞男集 別集』として2014年度に刊行開始となったのも、上の事情による。
- ・『丸山眞男集 別集』全5巻の刊行計画のうち、第4巻・第5巻が未刊のままであるが、丸山文庫所蔵資料の調査の進展によって、予想をはるかにこえた多様且つ広範な資料を確認したためである。既に、複雑な諸資料の調査・研究にとりかかっており、残された部分の刊行は短期間で達成できる所に至っている。なお、第4巻・第5巻に収録予定の諸資料は、デジタルアーカイブまたは本学図書館内で資料を公開すると共に、その主要なものは翻刻・公刊しており、従来の研究計画はすでに達成している。
- ・『丸山眞男講義録』続巻も、本事業期間中の刊行に至っていないが、やはり丸山文庫所蔵資料の内容が広範且つ多様で、翻刻等に困難をきわめたためである。但し、刊行の見通しは前記の通り、明確になっている。
- ・以上の事業と成果に対する評価は、多数のメディアによる紹介記事、丸山文庫所蔵資料(事業期間中の出版物を含む)を用いた諸研究の公刊によって知ることができる。

#### 【将来の改善に向けた方策】

- ・参加研究者の個々の研究・教育の中に、本事業から生み出された成果を生かしていく。特に本学の教育へのさらなる還元の方策を検討する。
- ・バーチャル書庫・デジタルアーカイブの運用、その更なる充実を進める。所蔵資料の更なる整理・調査とデジタル化・公開を継続的に進める。
- ・書簡資料類の調査と、それに基づくリストの公開、重要度の高い書簡の翻刻・公刊など、

本事業の中で進めてきたことを継続しつつ、新たな情報を発信する。・新渡戸稲造・南原繁研究等、本学のキリスト教主義及び建学の理念に関する研究に関わるよう検討を進める。

- ・研究成果を学内外に発信することにより本研究をさらに深め、今後も継続的に外部資金を得るよう努力して研究を進めていく。

## 第IV章 研究費の配分と活用

### 到達目標

研究費を適正に配分し、研究実施のため有効に活用する。

#### 1. 補助対象経費は適正に配分され有効に活用されているか

##### 【現状の説明】

##### (1) 研究施設・設備の整備と利用状況

###### ① 研究施設

本学図書館内丸山眞男文庫室 74 m<sup>2</sup>及び丸山眞男記念比較思想研究センター26 m<sup>2</sup>において、安藤信廣・黒沢文貴の統督の下、本事業に係る若手研究者 6 名及び本学大学院生・学部学生が同文庫資料の整理と調査研究、デジタル化等を行っている。

###### ② 研究設備の整備と利用状況

###### ・ 画像データ撮影機器

丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ構築のため、丸山眞男文庫室に高速かつ高解像度（400dpi）でのデジタル化が可能なオーバーヘッド型ブックスキャナ BookShot3600 を 2013 年度 10 月に設置し、草稿類資料のデジタル化を行っている。2014 年 8 月末日現在の累計稼働時間は 725 時間、2016 年 12 月 16 日現在の累計稼働時間は 2,095 時間である。第Ⅲ章で述べたように、2013 年度 10 月の設置後、2016 年 12 月 16 日現在、以下の資料のデジタル化が終了している。

a) 丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料 約 2,300 点（約 5,000 点のうち 46%）

b) 丸山眞男文庫所蔵楽譜類（書込みのあるページ） 434 冊（100%）

c) 新たに発見された書込みのある図書 66 点

その内、楽譜類及び新たに発見された書込みのある図書の情報は、東京女子大学図書館 OPAC で公開され、デジタル化した書込み部分の画像を図書館内にて閲覧に供している。他方、草稿資料は、デジタルアーカイブで情報を公開している。デジタル化した当該資料の画像は、著作権処理を済んでいるものを中心に、デジタルアーカイブ及び図書館内で公開している。

###### ・ バーチャル書庫

「丸山眞男文庫バーチャル書庫」は、2014 年度に構築を開始し、2015 年 3 月 9 日に公開した。2016 年 12 月までのアクセス総数は約 12,700 件となっている。米国・英国・ロシア・中国・韓国など、世界各国からのアクセス数の増加には、本研究活動への着目度が現われている。インターネットを通じて思想家ないし知識人個人の蔵書状況を一般に公開したことは、例をみない試みであり、このようなアクセス状況は、今後ここから新たな研究が生まれていくことが期待される。

###### ・ デジタルアーカイブ

「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」は、2015 年 6 月 1 日に公開した。デジタル化を行った①の草稿資料の内、著作権処理を済ませた約 2,000 点をデジタルアーカイブにて公開している。2015 年 7 月 25 日\*から 2016 年 12 月までのアクセス総数は約 4,300 件である。デジタルアーカイブも、英国・米国などを中心に世界各国の研究者に利用されている。デジタルアーカイブで公開している資料に基づく研究も数多く見られる（第Ⅲ章 1 (3) その他の研究成果等を参照）。

\*公開後、7 月 24 日までアクセスカウントが正常に機能しなかったため、その間のアクセス数は不明となっている。

##### (2) 経費の見積もりの合理性

テーマ毎の補助対象経費の配分状況は、資料 2（研究進捗状況報告書 18「研究費の支出状況」）のとおりである。当資料に基づき、テーマ別の補助事業経費執行状況を比率で

見ると、2012年度はテーマ1が37.4%、テーマ2が62.6%、2013年度は41.1%と58.9%、2014年度は28.9%と71.1%、2015年度は26.9%と73.1%、2016年度見込みは36.9%と63.1%となっている。

なお、当資料に記載された経費以外に、テーマ2に関し、ポスト・ドクターの経費がある。

本事業に関する主たる経費の執行内容については、以下の通りである。

#### ①画像データ撮影機器

本事業では、デジタルアーカイブ構築に向けた丸山眞男文庫資料のデジタル化のため、画像データ撮影機器を私立大学等研究設備等整備費の研究設備として申請の予定を届け出していた。機種選定にあたり、読み取り解像度400dpi以上、高速スキャニング（1秒）を条件としたが、2012年2月申請時には、条件を満たす機種は事業計画額6,000千円となる一機種以外は見当たらなかった。しかし、2012年8月に上記の条件を満たし、さらにリアルモニター機能による撮影画像を確認しながらの撮影が可能となる優れた性能の新機種が申請時の1/3以下の価額（1,984千円）で販売されたことが確認されたため、文部科学省及び本学理事に相談のうえ当該新機種へ選定機種を変更した。そのため申請要件を満たさなくなった私立大学等研究設備等整備費\*については申請を行わなかったが、大学の負担額は申請時点の予定額とほぼ同額である。

\*私立大学等研究設備等整備費：私立大学等の研究設備1個又は1組の価額が500万円（図書にあっては100万円）以上のものについて、購入に要する経費の3分の2以内の補助を行う文部科学省の補助金。

#### ②バーチャル書庫及びデジタルアーカイブ構築

本事業では前項で触れたデジタルアーカイブ構築の前段階として、2014年度にバーチャル書庫を構築した。バーチャル書庫及びデジタルアーカイブはシステム上の連携が必要であるため、双方を構築可能な業者への一括業務委託を検討してきた。2012年2月申請時には、デジタルアーカイブの草分け的存在であるA社よりバーチャル書庫構築費用として1,500千円の見積額を提示されていた。しかし、2014年度業者選定の際、A社並びに、同分野で導入実績を上げてきたB社から相見積を取得したところ、B社の見積額の方が低く、構築費で約60万円、2016年度以降の年間運用費で約40万円の差があった。また、B社はパッケージではなく本事業に合わせたシステムを構築する提案であった。

両者を比較検討した結果、構築費用及び2016年度以降の年間運用費をできる限り抑え、本事業に合わせたシステムの構築を可能とするB社に発注することとした。併せて、海外の研究者の本サイトへのアクセスの利便性を増すため、バーチャル書庫及びデジタルアーカイブ等に関する丸山文庫関連ホームページの日英・日中翻訳ページを公開することができた。

#### 【点検・評価、長所・問題点】

前項で示したように、テーマ毎の補助対象経費の配分状況は大きく異なり、テーマ1よりテーマ2の方が、配分割合が高い。これは、各テーマの研究目的と研究方法が異なること、特にテーマ2の研究目的の達成には、研究の展開と成果の公開のために、設備の整備、それを動かす人的資源の投入、及びシステムの構築が必要となるからである。

たとえば、2012年度にテーマ2で執行した経費の使途には、ノートパソコン及び周辺機器費用、2013年度以降は画像データ撮影機器導入に伴う作業費用、2014年度にはバーチャル書庫構築委託費用及びノートパソコン等機器費用、2015年度にはデジタルアーカイブ構築委託費用が含まれている。このように研究費を配分し、研究実施のため有効に活用してきたことは、本事業を進捗させ成果を上げるうえで、適正且つ必要不可欠の措置であるといえる。

画像データ撮影機器については、大学の負担額を増加することなく条件を満たし、更に高機能を備えた機種を選定できた。これにより丸山眞男文庫所未公刊草稿資料、楽譜をは

はじめとする書込みの図書の該当箇所のデジタル化をスムーズに進めることができ、テーマ2のスピーディーな進捗に資したことは評価できる。

また、バーチャル書庫及びデジタルアーカイブ構築に関して、費用を抑えつつも本事業に合わせたシステム構築が実現したことは、テーマ2における大きな成果を示したことはもとより、テーマ1を含む本事業全体の研究成果の充実、さらに一般の研究者・利用者へ広範且つ多様な研究リソースを資することができる研究拠点の基礎を築いたといえる。以上のように補助対象経費は適正に使用され、有効に活用されているとして評価できる。

#### **【将来の改善に向けた方策】**

バーチャル書庫とデジタルアーカイブの年間維持費が抑えられることは、補助事業期間終了後の研究拠点の持続的な運営と、研究成果の継続的な公開・充実に役立つと考えられる。全体として、補助事業期間後の研究拠点としての体制を十分整えられるよう外部資金の獲得に努力していく。

以上